

Japanese Journal of Mathematics 編集委員会より

Japanese Journal of Mathematics (JJM) は、2004–2005年の廃刊の危機を乗り越え、2006年より新体制がスタートしました。大正時代のJJMを第1期とすると、新体制は3期目となります (JJM 3rd Series)。

さて、トムソン・ロイター社では、自社で集計した引用数に基づいてJournal Citation Reports (以下ではJCRと略号で表記) を毎年発表しています。これは個々の論文に対してではなく、ジャーナルを対象とした評価指標です。旧JJMはこの評価指標の対象のジャーナルには含まれていませんでした。JJMの新体制がスタートして2年後の2008年にトムソン・ロイター社より、彼らの定めるところの主要雑誌の1つとして新JJMを取り扱う旨の通知を受け取りました。そして今回初めてJJMがJCRに登場し、そのインパクトファクターは0.885で、日本の数学雑誌中では1位となりました。

2009年版JCRでは国内の数学関連のジャーナルが以下のように発表されています。

ジャーナル名	インパクトファクター	発行母体
1. JJM	0.885 (215誌中48位)	日本数学会
2. JMSJ	0.586 (215誌中99位)	日本数学会
3. PRIMS	0.517 (215誌中127位)	京都大学数理解析研究所
4. Osaka J Math	0.515 (215誌中128位)	大阪大学・大阪市立大学
5. JJIAM	0.447 (応用数学175誌中150位)	日本応用数理学会
6. Tohoku Math J	0.400 (215誌中166位)	東北大学

インパクトファクター等の外形指標は、深淵な真理を追究しようという学問とは別世界のものであり、さまざまな弊害も指摘されています。良識ある学者としては、いかなる外形指標に対しても、それに左右されることなく超然とした態度を貫くべきであるというのが、私の個人的な考え方です。

一方、海外の一部の図書館では、ジャーナルの購読を打ち切る基準の一つとしてJCRによるインパクトファクターを用いることもあると聞きます。この意味においては、再建途上にあるJJMの編集委員会としては、今回の発表を素直に喜ばしいニュースと受けとめたいと思います。

JJM編集委員会 小林俊行